

乙 貞

第108号 通巻19巻第5号
2000年1月26日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
電話・FAX 077-585-4397

〒524-0212
守山市服部町2250番地

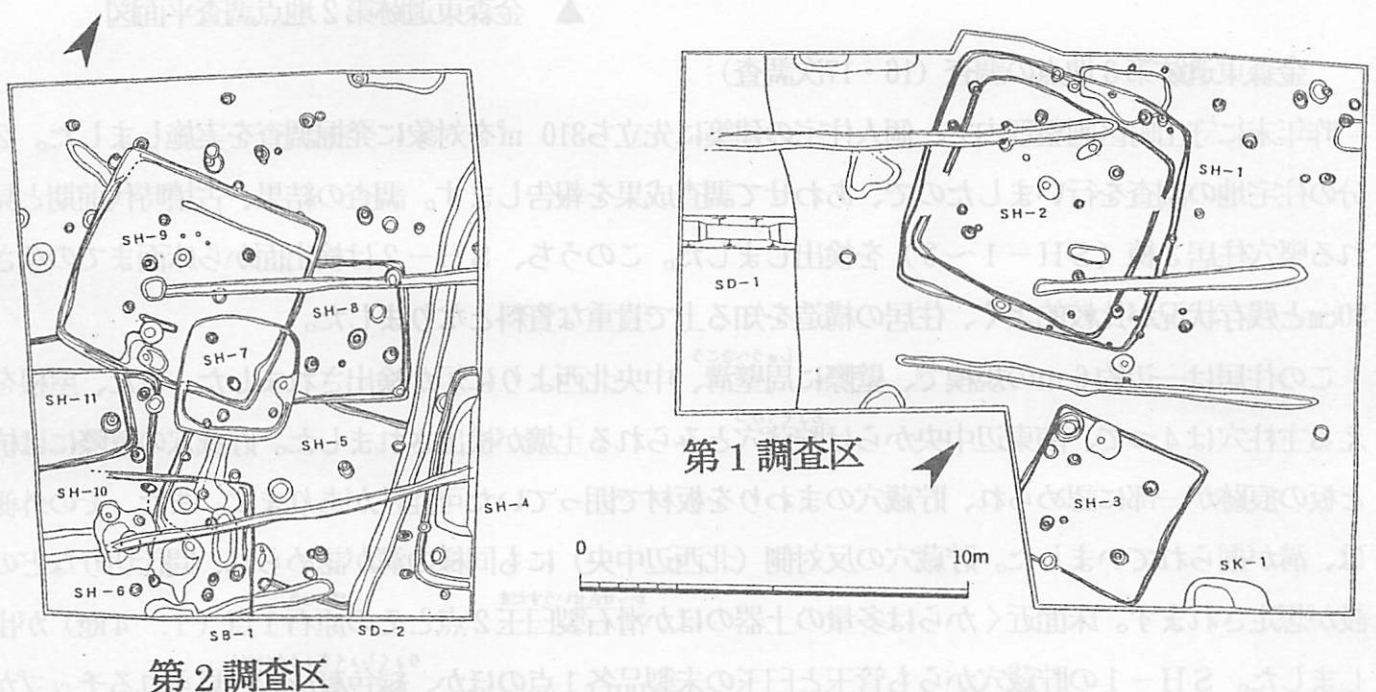
金森東遺跡の調査

守山高等学校の一带には、弥生時代から古墳時代にかけて発達する金森東遺跡が所在しています。守山高校東側は昨年、守山町土地区画整理事業が完成したことから、住宅やアパートなどの建築が増えてくると予想されていました。昨年暮れから区画整理内区域内で宅地開発の申請が続いて提出され、発掘調査を集中的に実施しました。今号の乙貞は、その調査成果を中心に紹介したいと思います。

第1地点の調査（14次調査）

昨年11月24日から12月17日にかけて、宅地造成工事に先立ち調査を実施しました。調査地は守山三丁目区画整理区域内の南端で、三津川に近い地点です。

調査地は道路を挟んで二箇所に分かれていて、東側を第1調査区、西側を第2調査区として調査を進めました。第1調査区では古墳時代初頭の竪穴住居跡3棟（SH-1～3）と、平安時代末期の土壇（SK-1）や溝跡（SD-1）などが検出されました。第2調査区では古墳時代初頭～後期にかけての竪穴住居8棟（SH-4～11）や溝（SD-2）、平安時代末期の掘立柱建物1棟（SB-1）などを検出しました。この地域では、これまでに約120～130棟の竪穴住居が見つかっていて、弥生時代後期から古墳時



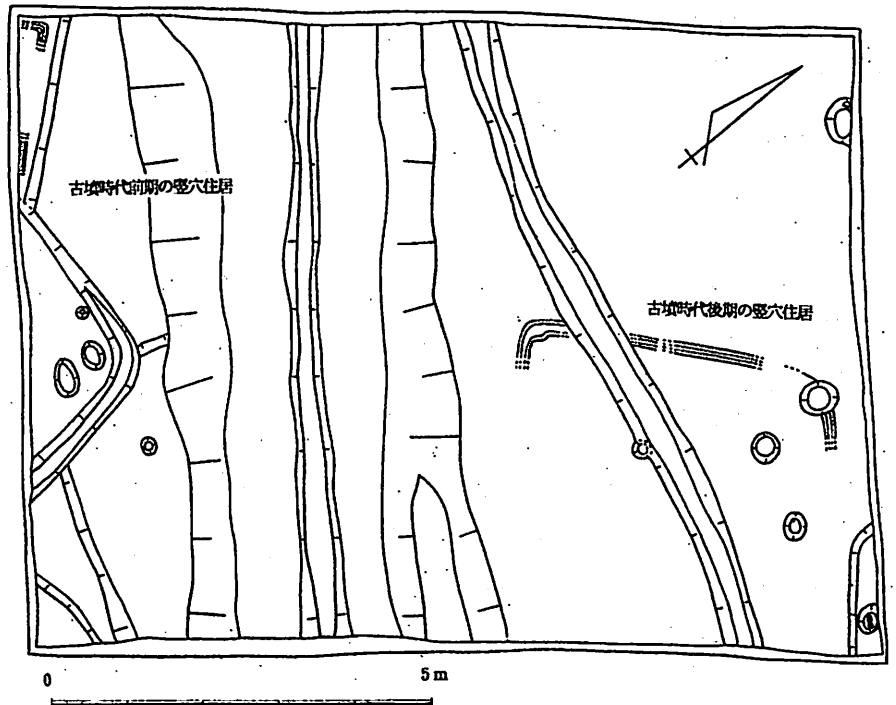
▲ 金森東遺跡第1地点調査平面図

代後期にかけて、継続的に営まれた集落遺跡であることが確認されていました。今回の調査でも一辺7mを測る大型のSH-1から一辺3.2mと小型のSH-7と規模の異なる竪穴住居が検出されました。住居の深さも、70cmもあるSH-9からSH-3・5のように、すでに床面が現れていたものなど様々です。カマドをもつSH-6・7などもあり、古墳時代前期から古墳時代後期にかけて時期の異なる竪穴住居が見つかり、竪穴住居の構造の変化が窺われます。(岩崎)

金森東遺跡第2地点の調査(15次調査)

第1地点から北東約100mの地点で個人住宅建築に先立ち120㎡を対象に調査を実施しました。今回の調査地点では、3棟の竪穴住居が検出されました。

住居から出土した土器から2棟は古墳時代前期、他1棟は古墳時代後期と考えられます。後世の削平を受けているものの、古墳時代前期の住居は残りが良く深いのにに対して後期の住居は浅く、時期によって深さが異なるようです。(大岡)

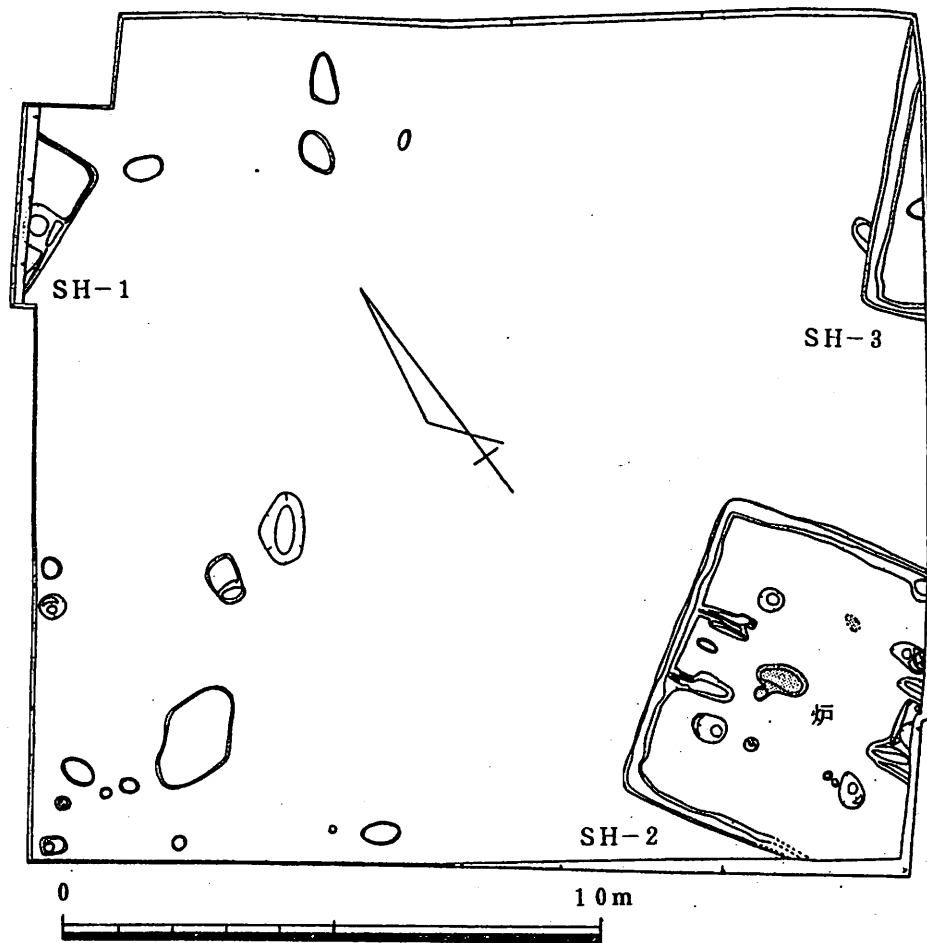


▲ 金森東遺跡第2地点調査平面図

金森東遺跡第3地点の調査(16・17次調査)

昨年末に守山町区画整理内で、個人住宅の建築に先立ち310㎡を対象に発掘調査を実施しました。2軒分の住宅地の調査を行いましたので、あわせて調査成果を報告します。調査の結果、古墳時代前期と見られる竪穴住居3棟(SH-1~3)を検出しました。このうち、SH-2は検出面から床面までの深さが30cmと残存状況が比較的良好、住居の構造を知る上で貴重な資料となりました。

この住居は一辺約6mの規模で、壁際に周壁溝、中央北西よりに炉が検出されました。また、屋根を支える支柱穴は4つで、南東辺中央からは貯蔵穴とみられる土壇が検出されました。貯蔵穴の壁際には杭穴と板の痕跡が一部に認められ、貯蔵穴のまわりを板材で囲っていた可能性があります。また、その外側には、溝が掘られていました。貯蔵穴の反対側(北西辺中央)にも同様の溝が認められ、間仕切りなどの施設が想定されます。床面近くからは多量の土器のほか滑石製白玉2点とその原石1点(1.4kg)が出土しました。SH-1の貯蔵穴からも管玉と白玉の未製品各1点のほか、緑色凝灰岩と見られるチップが多量に出土しています。金森東遺跡では滑石などの材料を用いて玉生産を行っていたようです。(小島)



▲ 金森東遺跡第3地点の調査平面図

金森東遺跡第4地点の調査 (18次調査)

個人住宅建築に先立ち、16・17次調査地点の北東側で調査を実施しました。耕作土直下で遺構検出を行った結果、耕作痕が幾つか検出されたものの、ほとんど遺構は検出されませんでした。区画整理内でも南西側は竪穴住居などの遺構が密集しますが、北東側は遺構密度が希薄です。今回の調査地点は金森東遺跡の南東隅に近い地点と考えられます。(伴野)

播磨田城遺跡の調査

平成10年12月から、宅地造成に先立ち発掘調査を進めてきた播磨田城遺跡の調査も、昨年12月末で終了しました。最後の調査区の概要について報告したいと思います。最後の調査区でも、溝を中心にした中世の遺構を検出していますが、その他に弥生時代後期の土壇1基と、古墳時代前期とみられる方形周溝墓1基を検出しました。

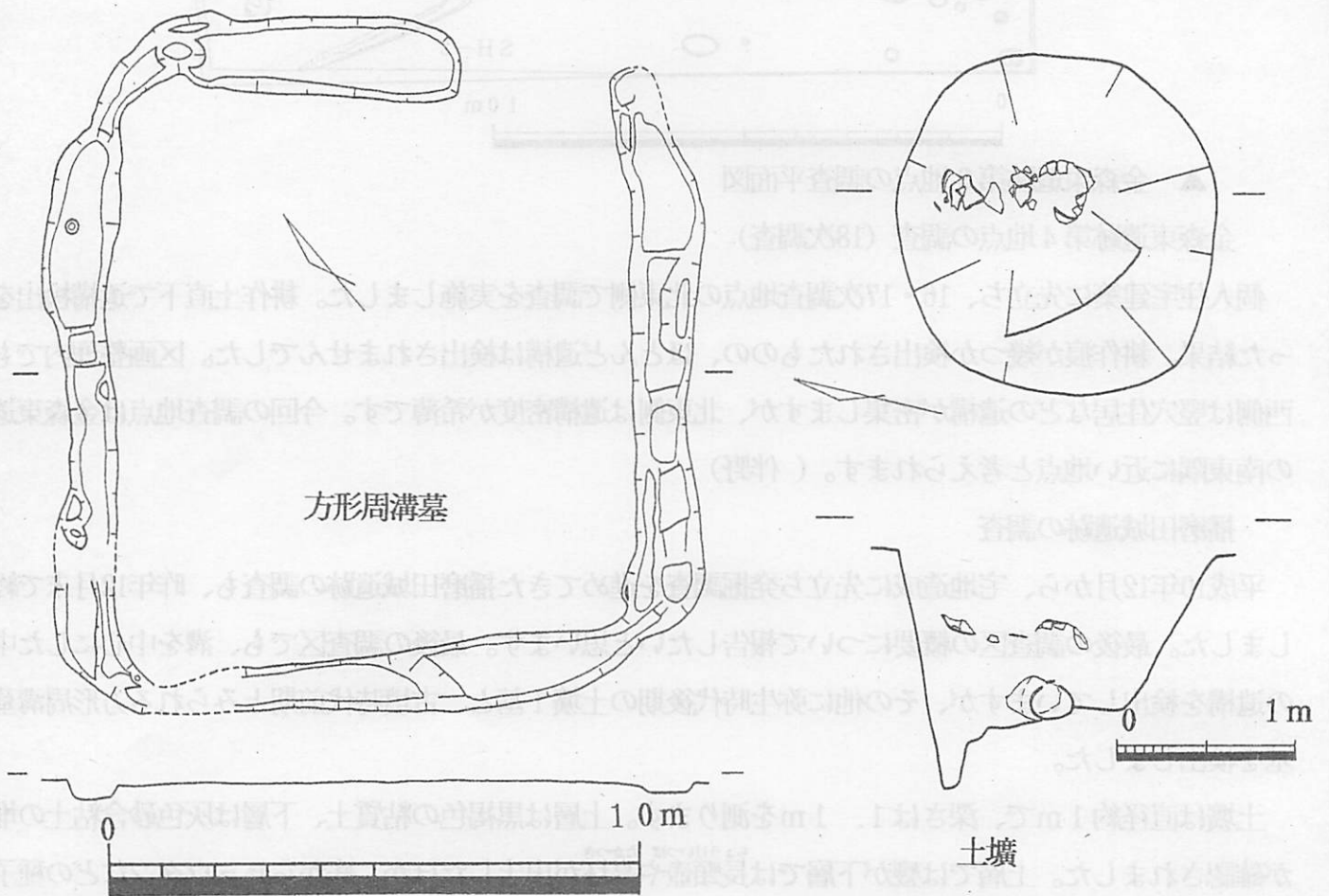
土壇は直径約1mで、深さは1.1mを測ります。上層は黒褐色の粘質土、下層は灰色砂含粘土の堆積が確認されました。上層では甕が下層では長頸壺や高坏ちようけいぼ たかづが出土したほか、底からヒョウタンなどの種子も見つかりました。この土壇は、水辺に近いところに単独で営まれていることから祭祀に係わる遺構ではないかと考えています。

方形周溝墓は、台状部が一辺9.5m×10mの規模で、周溝の東コーナーが一部途切れています。溝

の幅は0.9 ~1.5 mで、断面形は浅いU字形です。溝の幅はコーナー部で狭く、浅くなります。溝の埋土は黒色粘質土が堆積していて、高杯などの土器が出土しています。

調査当初は地名などから、戦国時代の城郭にかかわる遺跡ではないかと予想をたて調査をおこなって来ましたが、一年余りの発掘調査によって中世の集落遺跡であることが明確になってきました。掘立柱建物と井戸からなる屋敷地の回りに溝が巡り、そのような屋敷地が幾つも連結して集落を構成している様子が窺われました。

また、縄文時代晩期の旧河道が検出され、土偶をはじめ多数の土器とともに植物遺体などが出土し、当時の自然環境を復元するための貴重なデータとなったほか、遺跡の形成が縄文時代晩期にまで遡ることが判明しました。なお最後の調査区で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構が検出されたり、古墳時代後期の遺構などが存在することが明らかになり、かなり長期間にわたって遺跡が営まれていたことが判明しました。今後、整理調査をとおして播磨田城遺跡の内容について詳しく検討していきたいと思えます。(畑本)



▲ 播磨田城遺跡調査平面図 (方形周溝墓と土坑)